

書写指導は、ねらいを絞って

広島県尾道市立向東小学校 教頭 藤井浩治



広島県生まれ。2008年度まで広島県尾道市立土堂小学校に勤務。陰山英男校長在籍の3年間、教務主任として土堂改革に取り組み、数々の成果を上げる。光村図書 小学校・中学校「書写」教科書編集委員を務める。

限られた時間の中で、書写の基礎・基本をしつかり指導するためには、学習要素を焦点化することが重要です。これはまた、子どもたちに、書写への苦手意識を抱かせないためにも大切なことです。ねらいを絞った指導のあり方について、具体的な授業例をもとにご紹介します。

1 課題文字への意識

私が、書写の授業中に決して言わないように気をつけていること、それは「教科書の文字とそっくり同じように書きましょう」という言葉です。体育の水泳の授業で、オリンピック選手が泳ぐ映像を見せて、「これとそっくり同じように泳ぎなさい」と指示したりはしないでしょう。それと同じことです。

その単元で身につけさせたいことを焦点化し、課題文字のどの部分に子どもたちの意識を向けさせるのか、ねらいを絞ることこそ重要なのです。

2 ねらいを絞った授業

① 身につけさせたい力と授業のねらい

それでは、「幸福」という課題文字で「画の長短」について学習する授業を例に説明してみよう。この授業で子どもたちに身につけさせたい力は、「画の長短を意識して文字を書く能力」です。そして、そのためには、「横画が複数ある場合は、そのうち一画だけを長くして、他の横画はほぼ同じ長さにする」という原則を理解する必要があります。

試し書きのとき、ある子が「幸福」を図1のように書きました。「幸」を見ると、

うか」と発問し、考えさせます。それによって、「三本の横画のうち、一本だけを長くする」という原則を自ら発見させることができます。

続けて、図3のような二種類の「三」を提示します。「AとBの字の、どちらがより整っていますか」と発問し、二つの字形を比較させ、Aのほうの字形がより整っていることに気づかせます。このことで、子どもたちは、「長くしない横画は、ほぼ同じ長さにする」という原則にたどり着くことでしょう。自分で「そうだったのか!」と原則を発見するからこそ、納得し、深い理解が生まれるのです。

③ 原則を試し書きに当てはめさせる

「幸福」の「幸」の字は、複数の横画をもちます。ですから、原則を理解したとしても、具体的にはどの一画を長くす

全ての横画がほぼ同じ長さになっています。ここから、この子が「複数の横画は一画だけ長くする」という原則を理解していないことが分かります。「福」の組み立て方も気になるところですが、この授業のねらいは、横画の長さです。それを焦点化するために、教師はここで、ねらい以外のことは触れないように留意します。

② 原則を発見させる

次に教師が考えることは、「複数の横画のうち一画だけを長くする」という原則を子どもたちに発見させるための手立てです。ここで有効なのが、「比較法」

るのがよいかを考える必要があります。そこで、教師は「幸」の字を整えるには、どの横画を長くすればよいでしょう。そして、その他の横画は、どのように書くのがよいでしょうかと投げかけます。すると、「幸」の場合には、上から二番目の横画だけを長くし、その他の横画はほぼ同じ長さに書く」ということに、子どもたちは気づくはずで

その後、自ら発見し、理解した原則を、自分が書いた試し書きに当てはめてみようを促します。このように自己評価をさせることは、横画の長短を意識していなかったこれまでの自分を認識することにつながります。それが、「前はできていなかった。でも、次はもっと整えて書けそうだ」という意欲へと結び付くのです。

④ 原則に気をつけて書かせる

ここで、理解した原則をさらに確かなものにするために、原則を音読させたり、課題文字に原則を書き込ませたりしてみよう。このような音読や書き込みは、書写を苦手とする子どもたちの支援にも有効です。

その後、原則に気をつけて、再度、課題文字を書かせ、今度も、書いた字を原則に当てはめて自己評価をさせます。こ

図1: 試し書き



です。

例えば、図2のような「三」を見せて「三の『三』をどのように直せば、より整った字になるでしょうか」という発問をします。子どもたちから、「横画の長さを変えたほうがよい」という意見が出たところで、「それでは、三つの画のうち、いくつかの画を長くすればよいでし

図2



図3

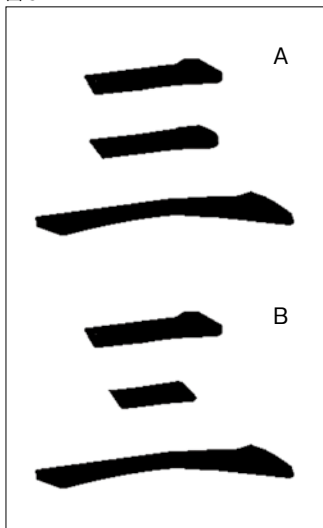


図5：まとめ書き



大きく成長したことが見て取れます。子ども自身、自分の成長に気づき、書写の学習が役に立ったことを実感するでしょう。まさに「幸福」を感じるひとときです。

⑧原則に照らして振り返らせる

グループや全体で、授業の振り返りを行います。数名の子の試し書きとまとめ書きを黒板に掲示し、振り返って考えたことを発表させるのもよいでしょう。教師は、ここでも、ねらいから外れた評価をしないように心がけます。必ず原則に照らして、よくなったこと、できるようになったことを発言させるようにしましょう。

図6



子どもたちから、「『青』は上から三つ目の横画だけを長くして、他は、ほぼ同じ長さにすると整います」「『書』は……」という発言が出たら、図7のような正解のカードを見せます。そして、「横画が複数ある漢字を書くときには、今日学習したことに気をつけましょうね」と、原則を押さえてから授業を終わりたいものです。

図7



ねらいを徹底した、ぶれない授業について述べてきました。書写の授業には、ねらい以外のことを指摘しすぎる傾向があるのではないかと、私は感じています。このことが、子どもたちの、書写への劣等感を生む一因になっているのではないのでしょうか。課題文字と比較し、「ここができていない」という否定の言葉を積み重ねるのではなく、ねらいを焦点化することで「ここができるようになった」という肯定的な評価を積み上げるようにしていきたいと、いつも考えています。

もちろん、ねらい以外のことを全く指導しないわけではありません。既習事項を活用し、文字をさらに整えることも必要な力です。ねらいと同様、既習事項の活用についても、肯定的な評価を積み上げていくことが大切です。

3 否定ではなく肯定を

ここでは、ほとんどの子が、原則に沿って書くことができています。

⑤書写が苦手な子どもに配慮する

子どもたちの技能を定着させるために、練習の時間を取ります。ここで重要なことは、「原則を理解できても、書くときにそれを生かせない」という、書写技能が十分でない子への支援です。このときに助けとなるのが、練習用紙です。

学習指導書の付録CD-ROMには、練習用紙が各種収録されています。これらを活用すれば、「穂先マーク」「骨書き」「かご字」など、いくつかのガイドを組み合わせた練習用紙を作ることができます。

今回の場合、授業のねらいは、横画の長さについての原則を理解することなので、図4のような「骨書き」の練習用紙を使うのが適切でしょう。穂先の向きを意識させたいときには「穂先マーク」の練習用紙、力の入れ方を定着させたいときには「かご字」の練習用紙など、ねらいに応じて使い分けることが重要です。適切に活用することができれば、書写の苦手な子ども、なぞり書きの要領で、原則に沿った字を書くことができ、新たな自信につながります。教室には、子どもたちの笑顔がこぼれます。

図4：「骨書き」の練習用紙の例。学習指導書付録CD-ROMには、このような練習用紙が収録されている。



⑥原則に照らして机間指導をする

子どもたちが練習をしている間、教師は机間指導を行います。このときも、原則に照らした評価の言葉を短く伝えるにとどめるようにします。ここでは、「『幸』の横画を、一画だけ長く書いていて、字形が整っているね」「他の横画をほぼ同じ長さで書いていいね」と、肯定的な評価を繰り返します。「少し細かいから気をつけよう」「もう少し大きく書こう」などと、ねらいから外れた評価を決してしないよう、留意することが重要です。

⑦まとめ書きと試し書きを比較させる

原則に留意しながら、まとめ書きをしたら、それを試し書きと比較させます。机の上に二つを並べて置くなどすれば、字形の違いが明確になり、原則に照らして、自分の字がどのように変わったかがはっきりと自覚できます。

図5は、図1を書いた子によるまとめ書きです。「幸」の字に着目すると、「複数ある横画のうち一画だけを長くして、他の横画はほぼ同じ長さにする」という原則を意識して書かれていることがよく分かります。わずか四十五分間の授業で、